

小説表現における叙述層の重層構造

土部 弘

一

『文章表現論』は、文章表現の「なりたちかた」を考察する(一)「文章成立(性質)論」、「しくまれかた」を考察する(二)「文章構成論」、「のべられかた」を考察する(三)「文章様相論」、という三領域にわたり、三領域は次のように関連する、と認められる。文章成立(性質)論の課題(一)「空間的全体と時間的全体」は、文章構成論の課題(二)「結構と文脈」にもひき継がれる。「空間的(同時的)全体」と「時間的(継時的)全体」、すなわち文章表現の(一)「統一性」と「展開性」との関連性は、「文章構成」(しくみ)の(二)「結構」(くみたて)と「文脈」(すじみち)との関連性にも顕現される。そしてさらに、それは、文章様相論の課題(三)「叙述の層序」にもひき継がれる。文章表現の「しくまれかた」は、各種機能の文を積み重ねる「のべられかた」によって、文章作品に定着している。そのような

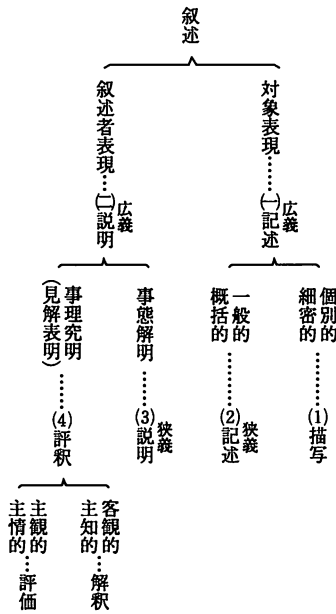
「ものごと」やその「とらえかた」は、そのような「記述・描写」や「説明・評釈」の配列によって、「叙述」面に「層序」をなして顕現されている。⁵⁰⁾

表現主体は、ある「ものごと」をある「とらえかた」でとらえて表現するが、「ものごと」のありように即して表現する場合と、「とらえかた」のありように即して表現する場合とが、見分けられる。

「叙述」は、そのような表現方法に即して、「ものごと」本位の「対象表現」である(一)「広義 記述」と、「とらえかた」本位の「対者表現」である(二)「広義 説明」とに、二大別され、それぞれは、さらに次表のように細分される。

(一)「広義 記述」は、「事態」(ものごと)を個別的・細密的に詳述する(1)「描写」と、事態を一般的・概括的に略述する(2)「狭義 記述」とに、識別される。小説や芸術的随筆の主要部分は(1)「描写」であり、新聞社会面記事の主要部分は(2)「狭義 記述」で

ある。また、(二)「広義」説明は、「事態」(ものごと)を分析・総合して内部の要素を相互関係によって位置づけたり、その事態を外部の事態と関係づけて位置づけたりすることによって、「事態」の存立事情を「解明」する、という(3)「狭義」説明」と、事態を客観的・主知的に「解釈」して意味づけたり、事態を主観的・主情的に「評価」して意味づけたりすることによって、「事理」を「究明」し、「見解」を「表明」する、という(4)「評釈」とに、識別さ



れる。「説明文」「解説文」の主要部分は(3)「狭義」説明であり、「論説文」「評論文」の中心部分は(4)「評釈」である。

どのような機能の文が、どのように積み重ねられ(筋道づけられ、組み立てられ)て、どのような機能の文章表現が成り立つか、とい

う文章表現の機能差(性質差)によって、大小いくつかの文章様式が識別されよう。「論説文」「評論文」などの「論理的文章」は、「主張」および「論拠」さらに「資料」などによって構成される。

したがって、「叙述者表現」が上層(上部構造)に位置し、「対象表現」が下層(下部構造)に位置して、「評釈」「説明」「記述」「描写」という「叙述層」によって構成される。「論理的文章」の「叙述層」と文章構成との関連性については、先稿でやや詳細に検討した。

一方、「物語文」「小説文」などの「芸術的文章」は、「人物(性格)」「環境(背景)」「事件(行動)」などによって構成される。通常、「話題」を担う「人物」すなわち主人公や副主人公の行動・状態が、「話題」の「事態」として設定され、その「事態」に対する「説明」や「評釈」が配置される。したがって、「対象表現」が上層(上部構造)に位置し、「叙述者表現」が下層(下部構造)に位置する。通常「人物描写(記述)」「事物描写(記述)」「説明」「評釈」という「叙述層」によって構成される。細分すれば、主要部分の「人物描写(記述)」は、「談話描写(記述)・動態描写(記述)・静態描写(記述)・心中描写(記述)」というように、ものごと本位の描写(記述)ほど、より上層に位置して、四分(八分)される。同様に、「事物描写(記述)」も、「動態描写(記述)・静態描写(記述)」というように二分(四分)される。「小説文」では多種多

様な類型が認められるであろうが、本稿では、典型的な「物語」的「短編小説」の芥川龍之介「蜘蛛の糸」を取り上げて、「叙述層の重層構造」について検討したい。

二

芥川龍之介「蜘蛛の糸」

第一章（冒頭部——極楽場面）

① 或日の事でございます。② 御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、

独りでぶらぶら御歩きになつていらつしやいました。③ 池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうにまつ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。④ 極楽は丁度朝なのでございませう。

⑤ やがて御釈迦様はその池のふちに御佇みになつて、水の面を蔽つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。

⑥ (1) この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に當つて居りますから、(2) 水晶のやうな水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るやうに、はつきり見えるのでございます。

⑦ (1) するとその地獄の底に、健陀多と云ふ男が一人、外の罪人と一しよに蠢いてゐる姿が、(2) 御眼に止まりました。⑧ (1) この健陀多と云ふ男は、人を殺したり家につけたり、いろいろ悪事

を働いた大泥坊でございますが、(2) それでもたつた一つ、善い事を致した覚えがございます。⑨ と申しますのは、或時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。⑩ (1) そこで健陀多は早速足を挙げて、踏み殺さうと致しましたが、(2) 「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違ひない。その命を無闇にとると云ふ事は、いくら何でも可哀さうだ。」と、かう急に思ひ返して、(3) たうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやつたからでございます。

④ (1) 御釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、(2) この健陀多には蜘蛛を助けた事があるのを御思ひ出しになりました。⑤ さうしてそれだけの善い事をした報には、出来るなら、この男を地獄から救ひ出してやらうと御考へになりました。⑥ (1) 幸、側を見ますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。⑦ 御釈迦様はその蜘蛛の糸をそつと御手に御取りになつて、玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まつすぐそれを御下しなさいました。

第二章（展開部——地獄場面）

⑤ (1) こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一しよに、浮いたり沈んだりしてゐた健陀多でございます。⑥ (1) 何しろどちらを見ても、まつ暗で、たまにそのくら暗からぼんやり浮き上がつてゐ

るものがあると思ひますと、(2)それは恐ろしい針の山の針が光るのでございますから、その心細さと云つたらございません。(17)(1)その上あたりは墓の中のやうにしんと静まり返つて、(2)たまに聞えるものと云つては、唯罪人がつく微な嘆息ばかりでございます。(18)これはここへ落ちて来る程の人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れはてて、泣声を出す力さへなくなつてゐるのでございませう。(19)ですからさすが大泥坊の権陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかかつた蛙のやうに、唯もがいてばかり居りました。

〔6〕(20)所が或時の事でございます。(21)(1)何気なく権陀多が頭を挙げて、血の池の空を眺めますと、(2)そのひとつそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるやうに、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るのではありませんか。(22)(1)権陀多はこれを見ると、(2)思はず手を拍つて(3)喜びました。(23)この糸に縋りついて、どこまでものぼつて行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。(24)いや、うまく行くと、極楽へはひる事さへも出来ませう。(25)さうすれば、もう針の山へ追ひ上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もある筈はございません。

〔7〕(26)(1)かう思ひましたから(2)権陀多は、早速その蜘蛛の糸を両手

でしつかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。(27)元より大泥坊の事でございますから、かう云ふ事には昔から、慣れ切つてゐるのでございます。

〔8〕(28)しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございますから、いくら焦つて見た所で、容易に上へは出られません。(29)(1)稍しばらくのぼる中に、(2)たうとう権陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなつてしまひました。(30)(1)そこで仕方がございせんから、先一休み休むつもりで、(2)糸の途中にぶら下りながら、遙か目の下を見下しました。

〔9〕(31)(1)すると、一生懸命にのぼつた甲斐があつて、(2)さつきまで自分がゐた血の池は、今ではもう暗の底に何時の間にかかくれて居ります。(32)それからあのほんやり光つてゐる恐ろしい針の山も、足の下になつてしまひました。(33)この分でのぼつて行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れません。(34)(1)権陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出した事のない声で、(2)「しめた。しめた。」(1)と笑ひました。(35)(1)所がふと気がつきますと、(2)蜘蛛の糸の下の方には数限もない罪人たちが、自分ののぼつた後をつけて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ上へ一心によぢのぼつて来るではございませんか。(36)(1)権陀多はこれを見ると、(2)驚いたのと恐ろしいので、(3)暫くは

唯、莫迦のやうに大きな口を開いた儘、眼ばかり動かして居りました。

③⑦自分一人でさへ断れさうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪へる事が出来ませう。③⑧もし万一途中で断れたと致しましたら、折角ここへまでのほつて来たこの肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまはなければなりません。③⑨そんな事があつたら、大変でございます。④⑩が、さう云ふ中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まつ暗な血の池の底から、うようよと這ひ上つて、細く光つてゐる蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせとのほつて参ります。④⑪今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまふのに違ひありません。

④⑫(1)そこで健陀多は大きな声を出して、(2)「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のほつて来た。下りろ。下りろ。」(1)と喚きました。

④⑬その途端でございます。④⑭今まで何ともなかつた蜘蛛の糸が、急に健陀多のぶら下つてゐる所から、おつりと音を立てて断れました。④⑮ですから、健陀多もたまりません。④⑯あつと云ふ間もなく風を切つて、独楽のやうにくるくるまはりながら、見る見る中に暗の底へ、まつさかさまに落ちてしまひました。

④⑰後には唯極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月

も星もない空の中途に、短く垂れてゐるばかりでございます。

第三章(終結部)——極楽場面

④⑱(1)御釈迦様は極楽の蓮池のふちに立つて、この一部始終をぢつと見ていらつしやいましたが、(2)やがて健陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、(3)悲しさうな御顔をなさりながら、(4)又ぶらぶら御歩きになり始めました。④⑲自分ばかり地獄からぬけ出さうとする、健陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまつたのが、御釈迦様の御目から見ると、浅間しく思召されたのでございませう。

④⑳しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。⑤①(1)その玉のやうな白い花は、御釈迦様の御足のまはりに、ゆらゆら夢を動かして、(2)そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。⑤②極楽ももう午に近くなつたのでございませう。

三

第一章(極楽場面)の「大意」(アウトライン)は、上層に位置する主人公(釈迦)・副主人公(健陀多)の動態・静態を接続することによって、顕著に浮かび上がる。

⑤③御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになつ

第一章（極楽場面）

構成		叙述層								
		動態	静態	心中	動態					
人物の行動 要因	人物の状態 要因	人物の状態 要因 (行動)	人物の状態 要因	人物の状態 要因	人物の行動 要因	描写 記述	人物	健陀多	事物	説明・評釈
②					⑤					
					⑦					
					⑩					
					⑪					
					⑫					
					⑬					
					⑭					
					⑮					
					⑯					
					⑰					
					⑱					
					⑲					
					⑳					
					㉑					
					㉒					
					㉓					
					㉔					
					㉕					
					㉖					
					㉗					
					㉘					
					㉙					
					㉚					
					㉛					
					㉜					
					㉝					
					㉞					
					㉟					
					㊱					
					㊲					
					㊳					
					㊴					
					㊵					
					㊶					
					㊷					
					㊸					
					㊹					
					㊺					
					㊻					
					㊼					
					㊽					
					㊾					
					㊿					
					1					
					2					
					3					
					4					
					5					
					6					
					7					
					8					
					9					
					10					
					11					
					12					
					13					
					14					
					15					
					16					
					17					
					18					
					19					
					20					
					21					
					22					
					23					
					24					
					25					
					26					
					27					
					28					
					29					
					30					
					31					
					32					
					33					
					34					
					35					
					36					
					37					
					38					
					39					
					40					
					41					
					42					
					43					
					44					
					45					
					46					
					47					
					48					
					49					
					50					

ていらつしやいました。

⑤やがて御釈迦様はその池のふちに御行みになつて、水の面を蔽つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。

⑦(1)すると、(その)地獄の底に、健陀多と云ふ男が一人、外の罪

人と一しよに蠢いてゐる姿が、(2)御眼に止りました。

①(1)御釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、⑬(1)側を見ますと、

⑭御釈迦さまは(その)蜘蛛の糸をそつと御手に御取りになつて、

玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まつすぐ

にそれを御下しなさいました。

⑦⑭の指示語「その」を省略し、さらに、①(1)・⑬(1)を省略すると、②・⑤・⑦・⑭の四文だけで第一章の大意が浮かび上がってくる。

⑤「やがて」という情態副詞は、⑤文が③・④文を越えて②文と連続することを示しているし、⑦「すると」という順接(動機)の接続詞は、⑦文が⑥文を越えて直接⑤文と接続することを示している。

この「やがて」や「すると」は、それぞれ②段・③段の段落冒頭にあつて、極楽場面では事態がきわめて自然に展開していくことを暗示しているが、その自然らしさは、上層に位置するこれら四文の中間に介在している下層の描写・説明によって、さらに顕著に増幅されている。

まず、⑤文と⑦文との間に介在している⑥文は、⑦文の事態が必然的に成り立つ事情を説明している。⑤「御釈迦様(が)池のふちに御行みになつて、ふと下の容子を御覧にな」と、⑦「すると、

地獄の底に、健陀多が蠢いてゐる姿が、御眼に止まる、ということになる事情は、⑥(1)「極楽の蓮池の下(が)、丁度地獄の底に當つて」いるからであり、また、池の水が⑥(2)「水晶のやう(に)透き徹」つていて、⑥(2)「丁度覗き眼鏡を見るやうに、はつきりと見える」からである。しかし、そのことは、⑦「地獄の底(の)罪人(たち)」が見える、という事情ではあつても、⑦「健陀多と云ふ男が一人(だけ)」他の罪人たちの中で際立つて見えた、ということの事情ではない。⑦「健陀多と云ふ一人の男が」ではなくて、「健陀多と云ふ男が一人」と叙述されて、強調されている「一人」は、この作品では重要な意味を付与されていて、⑧「たつた一つ、善い事」や⑨「小さな蜘蛛が一匹」および⑬「極楽の蜘蛛が一匹」と照応している。⑦「健陀多と云ふ男が一人(だけ)」際立つて見えた事情は、後続文の⑧(2)および⑩に説明されている。

⑧「(1)この健陀多と云ふ男は、大泥坊でございますが、(2)それでもたつた一つ、善い事を致した覚えがございます。」という構文で、「(1)健陀多(に)は、覚えがございます」というように誤読されることが多いが、第一章の文脈内にあつては、「(御釈迦様には、健陀多が) たつた一つ、善い事を致した(と云ふ) 覚えがございます」という文意になるであろう。というのは、後続文に、「⑩(1)御釈迦様は、(2)健陀多には蜘蛛を助けた事があるのを御思ひ出しになりま

した。⑫さうしてそれだけの善い事をした報には、出来るなら、この男を救ひ出してやらうと御考へになりました。」と叙述されるからである。⑩(2)「健陀多(が) 蜘蛛を助けた事」を⑫「善い事」と評釈しているのは「御釈迦様」であり、⑧(2)「(御釈迦様には、健陀多が) たつた一つ、善い事を致した(と云ふ) 覚えがございます」から、⑦(1)「健陀多と云ふ男が一人(だけ) 外の罪人」の中でも際立つて、⑦(2)「(御釈迦様の) 御目に止」つたのである。そして、その⑧(2)「たつた一つ、善い事を致した覚えがございます」という理由が、後続文で、「⑨と申しますのは……⑩……からでございます」というように補足説明されている。

②・③段では、以上のように、上層に位置する⑤・⑦文が、主脈をなす「人物」の「状態・行動」を「描写・記述」する、という機能を分担し、下層に位置する⑤・⑦文間の⑥文と、⑦文直後の⑧・⑨・⑩文とが、上層の事態が自然に必然的に展開することになる「事情」を補足的に「説明」する、という機能を分担している。⑦文は、上層では⑤文と「すると」という順接(動機)の接続詞によって連接されているが、それだけではなく、下層の⑥文および⑧・⑨・⑩文とも、それぞれ「ダカラ」という順接(理由)の接続詞によって連接されるような連接関係になっている。このような二通りの連接関係が並行している重層構造が際立つように、図表では、上層

では実線とひらがな表記の接続詞（および副詞）、下層では点線とカタカナ表記の接続詞を記入した。

冒頭の①段でも、②・③段ほど顕著ではないが、②文と⑤文との間に介在する③文の事物描写が、②文から⑤文へと事態が自然に展開することになる必然性を補強する、という「要因」の機能を担っている。②「ぶらぶら」や⑤「ふと」という情態副詞が用いられているので、それぞれ「描写」層に位置づけたが、それらを省けば、概括的な「記述」である。ところが、その②文と⑤文との間に介在する③文の「蓮」の静態描写は、かなり細密である。「みんな玉のやうにまつ白（な）花」「金色の蕊」という視覚描写や「絶間なくあたりへ溢れて（ある）何とも云へない好い匂」という嗅覚描写（動態と感じ取る読者もあるう）は、ついそれらに誘われて、⑤「御釈迦様（が）池のふちに御佇みになって、ふと下の容子を御覧にな」ることになる、という必然性を補強する要因になっている。図表では、③・⑤文間の接続関係を示す「ソレデ」という順接（原因）の接続詞を記入した。

第一章末尾の④段では、⑫「出来るなら、この男を地獄から救出してやらうと御考へになりました。」と⑭「蜘蛛の糸を、地獄の底へ、御下しなさいました。」との間に、順接（理由）関係が認められ、⑬⑭「極楽の蜘蛛が一匹、銀色の糸をかけて居ります。」と

⑭「その蜘蛛の糸を、地獄の底へ、御下しなさいました。」との間にも、順接（原因）関係が認められる。前者は裏面的な接続関係であるが、後者は表面の直接的な接続関係である。④段では、このような表裏にわたる「要因」によって、⑭「御釈迦様は、蜘蛛の糸を、地獄の底へ、まつすぐに御下しなさいました。」という「人物の行為」に決着する必然性が際立っている。

四

中心場面の第二章（地獄場面）は、内部に冒頭部・展開部・終結部が設定されていて、自足性を備えている。冒頭部の⑤段⑮～⑰の中心文は、末尾の⑱「さすが大泥坊の健陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかかった蛙のやうに、唯もがいてばかり居りました。」という地獄場面の主人公「健陀多」の「動態描写」である。⑱文の文頭には「ですから」という順接（理由）の接続詞があつて、その理由は、直前に、⑲「ここへ落ちて来る程の人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れはてて、泣声を出す力さへなくなつてゐる」と「説明」されている。⑲「これは……のでございませう。」の「これ」の指示対象は、⑯・⑰文で、「血の池」の「事物」の「静態描写」や「事物」「罪人」の「描写的説明」である。

展開部（一）は、⑥・⑦段⑳～㉑で、⑥⑳「所が」という「逆説

て行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違」ない、と「思考」する。そしてさらに、②⑥(2)「その蜘蛛の糸を両手でしつかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのほり始め」る、という「行為」に取り掛かる。

展開部(一)では、まず、主人公の健陀多にとつて重大な意味を持つ(a)「要因」(②①(2))が提出される。そして、その要因に健陀多が無意識のうちに(b)「反応」(②②(2))し、さらに、意識して(c)「思考」(②③・②④・②⑤)し、その思考にもとづいて(d)「行為」(②⑥(2))する、という展開パターンによって、事態が展開されている。

展開部(一)～(五)〔⑥〕～〔⑩〕段では、図表の構成欄で示したように、このような展開パターンが、変型を含んで五回積み重ねられている。展開部(二)では、②⑧「しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございますから、いくら焦つて見た所で、容易に上へは出られません。」という「説明」から始まる。(「何万里となくございますから、容易に上へは出られません」は「容易に上へは出られませんでした」という意味の「事態記述」であるよりは、「容易に上へは出られるものではありません」という意味の「説明」であろう。) そういう当然な道理が(a)「要因」になって、②⑨(2)「もう一たぐりものほれなくなる、という不本意な(b)「反応」しかできなくなる。③⑩(1)そこで仕方がございませんから、先一休み休むつもりで(c)「心中記述

——思考」)、(2)糸の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見下ろす、という消極的な(d)「状態」に終わる。

展開部(三)だけは、③①(1)「すると」という「順接(動機)」の接続詞で始まる。③①(2)「血の池は、暗の底にかくれ」、③②「針の山も、足の下になつて」いる、という喜ばしい(a)「要因」であるから、当然なことで、健陀多は、即座に、③③「この分でのほつて行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れ」ない、と(c)「思考」する。そして、③④(1)「ここへ来てから何年にも出した事のない声で、(2)「しめた。しめた。」(1)と(言つて)笑」う(d)「状態」のである。

展開部(四)では、事態は再び暗転(悪化)する。③⑤(1)「所がふと気がつき(見つめ)ますと、(2)蜘蛛の糸の下の方には数限もない罪人たちが、自分ののはつた後をつけて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ上へ一心によちのほつて来るではございせんか。」という不慮の(a)「要因」に、すつかり驚愕して、③⑥(1)「健陀多は、(3)唯、莫迦のやうに大きな口を開いた儘、眼ばかり動かして」いる、という(b)「反応」しかできない。そして、③⑦「自分一人でさへ断れさうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪へる事が出来ませう。」と(c)「思考」する。

展開部(五)では、展開部(四)が反復され、事態がさらに急迫する。(四)

③⑤(2)「数限もない罪人たち」は、(五)④「罪人たちは何百となく何千となく」というようにズームインされ、(四)③(2)「まるで蟻の行列のやうに、よちのほつて来る」も、(五)④「うようよと、一列になりながら、せつせとのほつて」くる、というようにズームインされている。そういう切迫した(a)「要因」に対しては、④「今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまふのに違ひありません。」というように、周章狼狽(c)「思考」するしか仕方がない。④(1)そこで、健陀多は大きな声を出して、(2)「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。下りろ。下りろ。」(1)と喚く(d)「言語行為」ことになる。

展開部(一)～(五)を通じて、(a)「要因」は、多くは、「事物」や他の「人物」(罪人たち)についての「動態」および「静態」の「描写」層または「記述」層であり、一部は「説明」層であって、多様である。(b)「反応」は、健陀多の「動態」および「静態」の「記述」層時に「描写」層が分担し、(d)「行為」あるいは「状態」は、健陀多の「動態」および「静態」さらには「談話」の「描写」層または「記述」層が分担している。そして、(c)「思考」は、もちろんのことながら、すべて健陀多の「心中」の「描写」層または「記述」層が分担している。

終結部(Ⅱ・Ⅱ段)では、④「蜘蛛の糸が、ぶつりと音を立てて

断れ」た、という「事物」の「動態描写」と、⑤「ですから」⑦「(健陀多が)独楽のやうにくるくるまはりながら、暗の底へ、落ちてしま」った、という健陀多の「動態描写」とが、理由・帰結の關係で接続し、⑦「後には唯極楽の蜘蛛の糸が、空の中途に、短く垂れてゐるばかりで」ある、という「事物」の「静態描写」で終結している。

第二章に仕組まれている文間の接続關係は、ほとんど表面の直接的關係で、そういう意味では、文脈は直線的に展開している。ところが、(a)「要因」・(b)「反応」(c)「思考」・(d)「行為・状態」という展開パターンの反復には、ある種の屈折感・起伏感が感じられる。

そのように感じられる事情について、前川清太郎氏は、次のように、「接続語の順接・逆接の相互交替による重層」を指摘しておられる。^(五)

一般に知的論理的な発想や文体を持つ作家は接続語を多用するが、その典型は芥川龍之介である。たとえば「蜘蛛の糸」の第二段(中心部)の各節は、第二節から「所が」「かう思ひましたから」「しかし」「すると」「所が」「そこで」……と順接と逆説の接続語がほぼ相互交替的に用いられている。順・逆・順・逆という接続は、逆接だけの場合に比し、いっそう前文を否定する感じが強く、文脈が鋭く屈折するとき感じを与える。即ち前文と後文が異質の層によって重ねられているという印象を

与える。

この順接・逆接の相互交替は、単調な交替ではなく、緊密に文章構成と相即している。小場面(展開部(一)と(四)(五)の冒頭(a)「要因」の始め)に「逆接」の接続語が配置され、小場面(展開部(一)(二)と(五)の末尾(d)「行為・状態」の始め)に「順接」の接続語が配置されている、展開部(三)の末尾(d)「状態」の始め)には、接続語が用いられていないが、潜在している接続語を顕在化すれば、「順接(理由)」の「ダカラ」が配置されることになろう。表示すれば、次のようになる。

展開部(一) 20 所が…………… 26 かう思ひましたから

(a) 「要因」 (d) 「行為」

展開部(二) 28 しかし…………… 30 そこで

(a) 「要因」 (c) 「思考」・(d) 「状態」

展開部(三) 31 すると…………… 34 ダカラ

(a) 「要因」 (d) 「状態」

展開部(四) 35 所が

(a) 「要因」

展開部(五) 40 が…………… 42 そこで

(a) 「要因」 (d) 「言語行為」

展開部(一)(二)と(五)とは典型的であるが、中央の展開部(三)だけは、冒

頭(a)「要因」も末尾(d)「状態」も「順接」である。これは、展開部の中央で一度事態が好転することの反映であるが、中央での好転が、かえって、後続する展開部(四)(五)での暗転(悪化)を一層際立たせている。また、展開部(四)には、(d)「行為・状態」が見られないが、それは、(四)(a)「要因」・(c)「思考」が、(五)(a)「要因」・(c)「思考」で反復されて、(五)(d)「言語行為」へと連接しているからであって、最終段階での緊迫感を一層高めている。第二章は、「波乱万丈」の地獄場面である。そのような場面性が反映されて、「順接交替の重層構造」が際立っている。

五

第三章は、舞台が回って、再び「極楽場面」に回帰する。⑭(1)御釈迦様は、(3)悲しさうな御顔をなさりながら、(4)又ぶらぶら御歩きになり始めました。」という極楽の主人公「釈迦」の「(3)静態記述・(4)動態描写」は、第一章の②「御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになつていらつしやいました。」への回帰である。また、⑮「(1)玉のやうな白い花は、御釈迦様の御足のまはりに、ゆらゆら尊を動かして、(2)そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。」は、第一章の③「蓮の花は、みんな玉のやうにまつ白で、そのまん中に

第三章（極楽場面）

情景	人物の行動要因	構成				人物	描写・記述	説明・評釈
		叙述層		人物				
	④⑧(4)	描写	動態	釈迦	人物	描写・記述	説明・評釈	
	④⑧(1)	記述	静態	静態				
	④⑧(3)	描写	動態	健陀多	人物	描写・記述	説明・評釈	
	④⑧(2)	記述	静態	静態				
	⑤①(1)	描写	動態	事物	事物	描写・記述	説明・評釈	
	⑤①(2)	記述	静態					静態
		描写的		説明	事物	描写・記述	説明・評釈	
		記述的						
	⑤②	説明		事物		説明・評釈		
	④⑨	評釈的説明		事物		説明・評釈		

ある金色の蕊からは、何とも云へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。」への回帰である。その④⑧文と⑤①文との中間には、「人物（釈迦）」と「事物（蓮の花）」とは、地獄での事件の主人公「健陀多」に対する反応の仕方が異なる、という事情の「説明」が介入している。④⑨「健陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相だな罰をうけて、元的地獄へ落ちてしまつたのが、御釈迦様の御目から見ると、浅間しく思召されたのでございませう。」は、④⑧「(1) 御釈迦様(が) (3) 悲しさうなお顔をなさ」った事情の「評釈的説明」である。また、⑤②「極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事(④⑨「健陀多の無慈悲な心が、その心相当な罰をうけ」たこと)には頓着致し

ません。」は、⑤①「(1) 玉のやうな白い花(2)のまん中にある金色の蕊からは、何とも云へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて」いる、ということの理由の「説明」である。

「蜘蛛の糸」という作品全体は、第一章「極楽場面」、第二章「地獄場面」、第三章「極楽場面」、というように、中心場面の「地獄場面」を「極楽場面」が囲い込むように構成されていて、いわゆる「額縁構成」になっている。「動乱」の「地獄場面」と「静穏」な「極楽場面」との「対比構造」であり、「動・静の重層構造」である。

〔注〕

- (1) 土部弘「言語空間の仕組み——文章表現の叙述層と構成——」(表現学会「表現学大系」総論篇第一巻、教育出版センター、一九八六)
- (2) 土部弘「説明の機能——シンボジウムを司会して——」(表現学会「表現研究」第五八号、一九九三)
- (3) 土部弘「論説・評論の表現特性」(表現学会「表現学大系」各論篇第二七巻、教育出版センター、一九九〇)
- (4) 芥川龍之介「蜘蛛の糸」(筑摩書房「芥川龍之介全集」第一巻、一九六四)

- (5) 土部弘「叙述層と文章構成」(今井文男教授還暦記念論集刊行委員会『表現学論考』、中部日本教育文化会、一九七六)に、一部の図表のみ記載した。
- (6) 前川清太郎「文章における重層・背景」(表現学会『表現学大系』総論篇第一巻、教育出版センター、一九八六)